

## 表紙絵の鶏のこと

安 泰

表紙絵の鶏は、黒色オービントンという種類で、昔私が小学生の頃、茨城のいなかで飼っていたことのある当時として珍鶏だった。私は元来、軍鶏が好きで、母にせがんで雛分困らせたものだが、軍鶏はとも子どもには世話が出来ないし近所の鶏とケンカをするから、という理由で承知されなかった。その代りといって、父が町の鳥屋に頼んで取寄せたのが、この黒色オービントンである。私の欲しかったのは、がっちり引きしまった体と、鋭い目と、太い頑丈な脚をもっていて、国志の魂のような軍鶏だったのに、およそそれとは似つかぬ鶏を見せられて、めんくらってしまった。鳥屋は「この鶏の原産は外国で、つまり舶来の鶏で、めったにいないのだから」と、私の関心をこれに向けようとするのだが、私は内心こんな鶏なんかちっともよくねえや、と不満だった。けれどもこれを飼って十日も経たないうちに、すっかり好きになってしまった。全身黒光りする羽毛、真赤な鳥冠、堂々たる体軀、温和な性質、軍鶏とは全く異った魅力があって、私は子ども心に「おとなしくて、きれいでいい鶏だなあ」と思ったことを記憶している。産卵旺盛なおおかけを蒙って、一般に広く飼われている白レグのようなスマートなものではないが、丸く肥って白レグの倍もあるかと思われる親しみのもてる好漢である。

この子どもの頃に飼ったオービントンが忘れられなくて、東京でも学生時代に飼ってよく写生したのだが、今なお私の描く鶏はこれが多く登場してくる。去年の童画展の作品「ソップの「鶏とダイヤ」」にも、さしえカット類にも、この「幼児教育」の表紙もその一つである。この鶏の美しさは、全身真黒な羽毛と鳥冠の赤の対象にあるのだが、この表紙の場合、鳥冠だけに赤を塗るというわけにはいかない。どうやら印刷過程をふむ仕事内では、色の制約という不自由な檻の中からは終生遁れることは出来ないようである。

て。」とそばへいった。三人は何か相談していたがやがて五人でハンドカスター、タンブリン、すず、小太鼓をもち出した。E子が「先生、音楽会聞きにきて。音楽会です。みんな聞きにきてください。」といったのでまわりのこどもたちも集ってきていすに座りお客様になった。T男がタクトをふりピアノはS子で合奏が始った。「こんどはず、太鼓はいかん、タンブリンもいかん。」と懸命に指揮した。ピアノは代ってE子、指揮はK子。お客様の子どもたちも楽器をもち合奏の仲間入りをした。そのうちにS子が「今から踊りするか。」「うんしやう。」とアレッキングのレコードをかけ二人ずつ手をつないで踊りだした。レコードをきいて集ってきた子どもたちも一しよになつておどりだした。後半をいろいろ工夫したり前半も三人、四人、大勢でするなど自由に考えておどり、みんなでフォークダンスを楽しんだ。さまざまの経験をしながら健かに育つてくれることを心から願う。